



Title	[補遺]
Author(s)	堀内, 壽郎
Citation	觸媒, 1, 93-94
Issue Date	1946-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/22387
Type	bulletin (article)
Note	補遺
File Information	1_P93-94.pdf



[Instructions for use](#)

[補 遺]

堀 内 壽 郎

反應はすべて素反應に分解し得らるるものとされてゐる。ここに問題とする不均一系觸媒反應に就いては、その律速反應が不均一系觸媒によつて、促進せらるる不均一系素反應であるとしなければならぬ。

反應速度の理論によれば、均一系・不均一系を問はず、素反應の速度では次式によつて表される。

$$v = k \frac{kT}{h} e^{-\frac{\Delta S^*}{R}} e^{-\frac{\Delta X^*}{RT}}$$

ここに k は透過係數であつて、齊時機構の素反應にては殆ど 1 に等しい。 k は Boltzmann 恒數、 T は絶対温度 h は Planck 恒數、 R は氣體恒數である。 ΔS^* は原系を恒壓の下に臨界系にもつて行くときに起る反應系のエントロピー増加、 ΔX^* はその場合に起るエントロピー増加、即ち活性化熱である。

ΔS^* は臨界系のあり得る場所の數の對數を加成項として含んでゐる、しかして、臨界系のあり得る場所の數は他の條件が同一ならば、陽子の數と陽子の住み得る空いた場所の數との相乗積に比例する。山口氏は、この相乗積がピロ磷酸に於いて最も大きくなることを指摘された。従つて ΔS^* はピロ磷酸の場合最も大きくなる。

筆者は山口氏の決定せられた磷酸の構造を基として、活性化熱 ΔX^* の各形態磷酸による差異を吟味する。

齊時機構に於いては、反應分子に飛乗らんとする陽子のエネルギーが、高いほど活性化熱が低く、従つて上式によつて、觸媒反應の速度が大きくなることは第 1 回の記事に述べた通りである。ところで陽子のポテンシャルが靜電氣的部分のみなるものとし、山口氏の決定せられた各形態磷酸分子の寸法、及び有効電荷を用ひて計算すれば次の如き結果を得る。

(オルト磷酸)	(ピロ磷酸)	(メタ磷酸)
-11.97 e.V.	-11.13 e.V.	-8.92 e.V.

この結果によれば、ピロ磷酸の ΔX^* はオルトのよりも小さく、従つて、ピロ磷酸の $e^{-\frac{\Delta X^*}{RT}}$ の方が大きい。この事と上記の $e^{-\frac{\Delta S^*}{R}}$ に就いての結果とにより、律速素反應速度はピロ磷酸の場合に決定的に大きいことになる。しかるにこの結果によれば、律速素反應速度は ΔX^* に関する限り、メタ磷酸の場合に相當大きくなければならぬ。然しメタ磷酸には陽子が 1 箇しかな

* 陽子が反應分子に飛乗ると同時に、別の陽子が反應分子から飛出して行く機構(堀内：本輯第 9 報)をかく名附けた。

い。若し正三角形の角 \star に陽子が坐つてゐて、隣接する分子と水素結合を作り、且つ水素結合を作らない陽子が餘されて、表面に浮んでゐるとすれば、1箇分子に就いて $\frac{3}{2}$ 箇の陽子を要する。従つて1箇分子に1箇の陽子ではそれに足りない。足りないならば、陽子はエネルギーの低い水素結合状態を選んで他分子との間に入り、表面に浮んで來ることはない。さうすれば山口氏が $4S^*$ に就いて論ぜられたことにより $e^{-\frac{4S^*}{R}}$ 従つて律速素反應速度は零にならなければならぬ。以上の結論によく大塚教授の實驗結果⁽¹⁾を説明する。又一方、1箇分子に就いて1箇の陽子が水素結合を作つて隣接分子の間に入るとすれば、各分子は架狀に繼がらなくてはならない。従つて、メタ磷酸はアルコール類と同様に、ガラス状態にあらねばならない。このことは既に實驗的に知られてゐる。

(1) 大塚：觸媒談話會第二回；固體磷酸觸媒について。